

# 中英語におけるフランス語借入語強勢の 史的变化に関する一考察

A study of stress change in words of French origin  
during the Middle English period

田中 明子  
Akiko S. TANAKA

本稿は、中英語におけるフランス借入語の語強勢を調査し、英語の強勢体系がいつ、どのように、そしてなぜ変化したのかを考察することを目的としている。ノルマン征服以降、大量のフランス語が英語にもたらされたが、これらのフランス借入語の強勢型は英語本来の強勢型とは非常に異なるものであり、英語の強勢体系に少なからぬ影響を与えたことは明らかである。しかし、フランス借入語の新しい強勢型は、借入源である古フランス語やアングロノルマン語の強勢型とも異なることに注意を払わなくてはならない。このことは古英語の強勢体系もフランス借入語の強勢型に大きな影響を与えたことを示唆するからである。本研究は、強勢は語幹の第1音節にあるという原理は古英語から中英語に引き継がれなかった一方で、語末強勢を避ける傾向は引き継がれたことが、英語にリズム強勢の原理を導入するきっかけとなったことを指摘する。

This paper investigates Middle English word stress and examines when, how, and why the English stress system changed during the period. After the Norman Conquest, many words entered English mainly from French. The stress patterning of these foreign words was quite different from that of Old English, and it is clear that it exerted a great influence on the stress system of the language. The newly introduced stress patterning of French words was, however, also quite different from that of Old French and Anglo-Norman, which implies that the stress system of Old English had a considerable effect on the stress patterning of these French words. It is suggested that although Middle English did not inherit the principle of initial stress from Old English, it did inherit the principle of leftward main stress, which in turn triggered the shift from isochronic rhythm to isosyllabic rhythm.

キーワード：中英語, フランス借入語, 語強勢, 史的变化

Middle English, words of French origin, word stress, historical change

## 1. はじめに

1066年のノルマン征服の後、英語にはフランス語およびラテン語からの借入語が大量にもたらされた。そ

の結果、英語には、従来のゲルマン語型の語強勢を示す語と新しいロマンス語型の語強勢を示す語が共存することになる。すなわち、中英語期以降の英語におい



- (4) a. N ætspyrning 'offence'  
           bígenga 'inhabitant'  
       A þúrhbèorht 'radiant'  
           únderþèod 'subjected'  
       V otspúrnan 'stumble'  
           begárgan 'visit'  
           þurhfón 'penetrate'  
           undergietan 'mark'
- (Nakao, 1985: 477)

決して単純とは言えない古英語の語強勢については多くの詳細な分析が行われているが、本稿では、強勢変化を探る目的から、以下の3点を古英語の特徴として挙げることにする。

- (5) a. 語頭音節は常に強勢を受ける。  
       b. 語末音節は強勢を受けない。  
       c. 語の前方にある強勢音節が主強勢を受ける。

このような古英語の特徴は、中英語においても限られた範囲ではあるが観察することができる。語頭音節のみに強勢を受ける以下の本来語が単強勢語であることもその例である。

- (6) a. N crónycle 'chronicle'  
       A sílueryne 'silvern'  
       b. N wáter 'water'  
           A líþer 'bad'  
           V béccyn 'beckon'  
       c. N see 'sea'  
           A schir 'beautiful'  
           V leet 'let'
- (Nakao, 1985: 479)

ただし、これらの例からも明らかのように、本来語は中英語期までに語末無強勢母音の弱化を受け、2音節または単音節語となってしまうている。この時代には、語幹の第1音節が強勢を受けるといふ古英語の原理はあいまいなものとなっていたと考えられる。

## 2.2. ロマンズ語の原理

本来語の非接辞語が中英語期までに事実上の単音節語となってしまう一方、フランス語からの借入語は2音節以上からなる多音節語であった。こ

れらの語の借入源であるラテン語および古フランス語 (Old French, OF) では、主強勢は音節の重さに応じて語末から2番目または3番目の音節のいずれかに置かれる。しかし、以下の例が示すように、アングロノルマン語 (Anglo-Norman, AN) はこの時代までに語末の無強勢音節を失っているため、中英語 (Middle English, ME) にフランス語が借入された時点では、主強勢は語の後方にある重音節に置かれていた<sup>5)</sup>。

- (7) OF honōrem > AN onour      ME honóur 'honor'  
       OF nātūram > AN nātūr(e)    ME natúre 'naure'
- (Pope, 1934)

中英語期に導入された新しい特徴として、ここで観察されたロマンス語の原理を以下に挙げる。

- (8) 語末音節が重音節の場合はその音節が、そうでないときには語末から2番目の音節が主強勢を受ける。

古英語の原理とは大きく異なる強勢型を示す語が英語に大量に借入されたことは、英語の強勢体系に少なからぬ影響を与えたはずである。実際、多くの研究者が、フランス借入語は元来のフランス語強勢と本来の英語強勢の間で揺れを示していると考えてきた。以下に挙げる Chaucer の詩行はその証拠として引用される典型的な例である<sup>6)</sup>。

- (9) In dívers art and in divérse figures (FrT 1486)

このような立場からの研究は、中英語には古英語の原理とロマンス語の原理の両方が存在していたことを示唆する。生成音韻論の枠組で語強勢変化を分析した Halle and Keyser (1971) の研究以降、古英語の強勢型を説明するゲルマン強勢規則と中英語の強勢型を説明するロマンス強勢規則は相反する規則であり、新しく導入されたロマンス強勢規則が英語の強勢型を大きく変えたとの見方が有力であった<sup>7)</sup>。

## 2.3. 新しい二重強勢語

しかし、14世紀の頭韻詩と脚韻詩を詳細に分析した Nakao (1972) は、フランス借入語は従来主張されているように強勢二重語ではなく、従来の主強勢が左側へ推移し、その後副強勢を残した二重強勢形で

あるとの解釈を示している。後述するように、この解釈は非常に重要なものである。(7)に挙げた語末強勢を示すフランス借入語は、以下に示すように中英語で二重強勢語となり、その後、語末強勢を失ったのである。

- (10) honóur > hónour > hónor 'honor'  
 natúre > nátúr > nátur 'nature'  
 bachelér > bachelèr > bacheler 'bachelor'  
 (Nakao, 1972: 456)

その証拠としてまず挙げられているのは、語末強勢が脚韻に利用され、語頭強勢が頭韻に利用される以下のような例が、中英語には繰り返し現れることである。その数は派生接尾辞をもたないものだけで350例以上にのぼる(Nakao, 1978: 23-35)。

- (11) a. Bycawseþou may wyth ygen me se;  
 Anoþerþou says, in þys cowntre (Pearl 297)  
 b. Pat caȝt watz in þe captyvide in cuntre of Jues;  
 (Cleanness 1612)

また、以下のように同一詩行内で(×)×´ 韻律型を示す3音節以上からなる語が存在することも二重強勢を支持する証拠となる。Nakaoが挙げる接尾辞を持たない語の例は160語を超える。

- (12) a. N páradýse 'paradise'  
 A córporéll 'corporal'  
 V sácrífice 'sacrifice'  
 b. N septémtrióun 'septentrion'  
 A partículér 'particular'  
 (Nakao, 1978: 35-8)

さらに、第2半行の韻律型を構成するために大範疇語が2個の強勢を持つと考えられる詩行と、前半行が韻律的であるために大範疇語が2個の強勢をもたなければならない以下のような詩行からの例は20余りある(Nakao, 1978: 38-41)。

- (13) a. Bot he had craued a cosse, bi his courtaysye  
 S W  
 'Unless he had asked for a kiss by his courtesy'  
 (Gawain 1300b)

- b. And of absolucioun he on þesegecalles  
 S W  
 'And he asked the priest for absolution'  
 (Gawain 311b)

後述するように、これらの韻律的証拠のほかにも Nakao は音韻的証拠も挙げており、その研究は従来の強勢二重語との見方を覆すに十分な精度をもつ。

### 3. 中英語における強勢変化

#### 3.1. リズム強勢

Nakaoの収集した言語資料の中で注目すべきもう1つの点は、主強勢が必ずしも語幹の第1音節にあるのではないことを示す(14)のような例が、非接尾辞語だけでも10例余り挙げられていることである。

- (14) N demónyák 'demonic'  
 dispútisoun 'disputation'  
 ecclésiáste 'Ecclesiast'  
 miséricórde 'misericord'  
 oblívión 'oblivion'  
 septémtrióun 'septentorion'  
 A partículér 'particular'  
 supériour 'superior'  
 (Nakao, 1978: 35-7)

(12a)に挙げた2音節および3音節語の場合には、主強勢は語頭に置かれるため、古英語の語頭強勢の原理が働いているかのように見えるが、その予測に反し、4音節以上から成る語の場合には、主強勢は第1音節ではなく第2音節に置かれるのである。ここに観察されるフランス借入語の強勢型を以下に挙げる。

- (15) 強勢音節に先行する音節が1つのみの場合はその音節が強勢を受け、それ以外の場合は強勢音節に先行する音節は1つおきに強勢を受ける。

4音節以上からなるフランス借入語が示す強勢型が語頭強勢を特徴とする古英語の原理(5a)を引き継いだものではなく、新しく英語に導入されたロマンス語の原理(8)に従っていることは明らかである。さらに、中英語には、強勢音節に先行する音節が無強勢音節の連続となることを避けるリズム強勢の原理も働いていたことがうかがえる。

### 3.2. 強勢の左方移動

それでは、なぜ、中英語期の語強勢は、借入源であるアングロノルマン語の語末強勢を保ちながら新しいリズム強勢へと変化していったのであろうか。その答えを英語本来の特徴に求めることは、ごく自然なことであろう。以下に再掲する古英語およびアングロノルマン語の特徴を比較すると、変化を可能にした要因として、フランス借入語の語末強勢を受け入れる素地が中英語にあったことが指摘できる。

- (16) OE a. 語頭音節は常に強勢を受ける。(=5a)  
 b. 語末音節は強勢を受けない。(=5b)  
 c. 語の前方にある強勢音節が主強勢を受ける。(=5c)  
 AN d. 語末音節が重音節の場合はその音節が、そうでないときには語末から二番目の音節が主強勢を受ける。(=8)

第2節でも述べたように、古英語の語頭強勢の原理(16a)(=5a)は中英語期までにはきわめてあいまいなものになっており、フランス借入語の語末強勢を排除するほどの影響力はなかったと考えられる。フランス借入語の強勢型はこの古英語の原理と衝突することはなかったはずである。

また、ひとたび元来の主強勢が左側に移動されれば、その音節が主強勢を受け、語末音節は副強勢として残ることは、語の前方にある強勢音節が主強勢を受けるという古英語の特徴(16c)(=5c)が中英語に引き継がれていたと考えれば、説明できる。古英語の接頭辞語と複合語がどの程度中英語に受け継がれたのかについては今後の研究を待たなければならないが、中英語期まで二重強勢を保っていたと思われる(17)のような接頭辞語の存在は、古英語のこの特徴が中英語にも受け継がれたことを支持する証拠になり得るであろう。

- (17) N fórbòde 'prohibition'  
 A úncouþ 'strange'  
 V mísdò 'misdo'

(Nakao, 1985:486)

このように、語幹の第1音節が強勢を受けるという原理があいまいになったことによってフランス借入語の語末強勢を受け入れる素地ができていたこと、そし

て、下げ型の強勢型を保証する原理はよく引き継がれていたことがフランス借入語の強勢型がなぜ変化したのかをある程度までは説明している。なお、中英語の語末音節が強勢音節であることを裏付ける音韻的証拠として、語末音節が強勢音節に固有の音過程を示すことや、語末音節が無強勢に固有の音過程に抵抗を示すこと、そして語末音節が初期近代英語において大母音推移の出力を示すことが挙げられる。このうち、以下に示すような語末音節が無強勢に固有の有声化に抵抗を示すことは、この音節が強勢を受けていたことだけでなく、副強勢を受けていたことの証拠になる。

- (18) comfort ~ coumforde  
 leopart ~ lebardes  
 pendauntes ~ pendaundes  
 tabart ~ tabarde  
 knoweliche ~ knowlage

(Nakao, 1978: 41-2)

### 3.3. 語末強勢の回避

最後に残るのは、なぜフランス借入語は元来の主強勢を左側に移したのかという問いである。前節で述べたように、語頭強勢の原理(16a)は中英語には受け継がれなかった一方で、下げ型の強勢を示す特徴(16c)は受け継がれた。前者はフランス借入語が語末強勢を保った理由を説明し、後者はフランス借入語が下げ型の強勢型を持つようになった理由を説明する。最後の問いであるフランス借入語が語末強勢を保ちつつ主強勢を語の前方に移した理由を説明するのは、古英語から受け継がれたもう1つの特徴である語末強勢を嫌う傾向(16b)(=5b)であろう。

第2節で述べたように、本来語の語末母音は弱化母音または弛緩母音からなる音節であり、(6a-b)に示した通り、強勢を受けることはない。また、以下(19a)および(19b)に例を挙げたように、フランス借入語の語末 <-y> は常に副強勢を受けるのに対して、本来語の語末 <-y> は無強勢 [i] である。さらに、中英語の新しい特徴に従って語末強勢を示す例は(19c)に挙げた4例だけであることは、語末強勢を嫌う傾向は中英語でも非常に強かったことを示す。

- (19) a. N ágonÿe  
 théologie  
 A príuÿ 'privy'

	V	tárie	'tarry'
b.	N	bárli	
		pény	
	A	éempty	
		rédy	
	V	búry	
		méry	
c.	N	bodíes	bódi
		lílíe	lýlie
	A	meríe	mérye
		werý	wéry

(Nakao, 1978: 43-6)

フランス借入語の語末強勢は、英語が本来持っていたこの傾向の影響を受けて、主強勢を語末から移動させなくてはならなかったのである。中英語は従来言われていたように古英語から語頭強勢の原理を受け継いだのではなく、語末強勢を嫌う傾向を受け継いでいることが、中英語期に表層的な語強勢が大きく変化した理由の1つであることがわかる。

#### 4. まとめ

本稿では、フランス借入語は強勢二重語ではなく二重強勢語であるとの立場から、古英語本来の強勢型とアングロノルマン語の強勢型が接触したことによって、どのように強勢が変化したのか、また、なぜ強勢が変化したのかを論じた。英語の強勢が中英語期にゲルマン語型の強勢型からロマンス語型の強勢型にどのように変質したのかは、ゲルマン強勢規則とロマンス強勢規則の交替や、韻脚を作る方向を決めるパラメータ値の変化、あるいは制約の順序付けが入れ替わったことなどでも説明されてきたことであるが、本稿では、どのような特徴が受け継がれ、どのような特徴が受け継がれなかったのかに焦点を当てることによって、変化の過程だけではなく、変化の原因の説明を試みた。特に、受け継がれた特徴と借入語の特徴が衝突した際の解決策として導入された強勢型が、英語の強勢型を中英語期に大きく変質させたことを示した。

近年、Minkova によって、中英語期の語頭強勢と語末強勢の揺れが、従来主張されていたほど均一なものではなく、中英語の強勢型は依然としてゲルマン型の強勢型であったというたいへん興味深い研究がなされた<sup>8)</sup>。Minkova は、中英語期の揺れの程度は語によって異なり、多くは韻律上の要請に起因するものである

と結論し、英語がロマンス型の強勢型を持つ言語に移行したのは、ルネッサンス期に大量のラテン語が借入されて以降のことであるとの見解を示している。しかしながら、語末音節がある程度のレベルの強勢を持ち得たことを認めるとともに、中英語期に同じ語根から派生した語が異なる強勢位置を示す(20)のような語が英語に新しいパラダイムをもたらしたと指摘したことは、中英語期に語末強勢を避けるために強勢の左方移動が起こったとする筆者の主張を裏付けるものである。

(20)	móral	-	morólítèe
	párish	-	paríshonèr
	sólem	-	solémpnitè
	vólume	-	volúminous

(Minkova, 2007: 173)

中英語の派生語の強勢型に関する詳細な研究はもとより、後期古英語における本来語およびロマンス起源語の強勢型とルネッサンス期にラテン借入語が示した強勢変化の研究が、今後の課題である。

#### 引用文献

- 1) Nakao, Toshio, *The prosodic phonology of Late Middle English*, Tokyo: Shinozaki (1978).
- 2) Tanaka, Akiko S, *An Edge Marking analysis of initial stress in Middle English*, *Tsuda Inquiry*, 17, (2006).
- 3) Nakao, Toshio, *History of English II*, Tokyo: Taishukan (1972).
- 4) Nakao, Toshio, *English Historical Phonology*, Taishukan (1985).
- 5) Pope, M, K, *From Latin to Modern French with especial consideration of Anglo-Norman*, Manchester University Press (1934).
- 6) Larry D. Benson (ed.), *Riverside Chaucer*, London: Oxford University Press (2008).
- 7) Halle, Morris, and Samuel Jay Keyser, *English Stress: Its Form, Its Growth, and Its Role in Verse*, New York: Harper and Row (1971).
- 8) Minkova, Donka. *The forms of Speech*, In: *Companion to Medieval English Literature and Culture: c.1350-c.1500*, Peter Brown (ed.), Malden, M: Blackwell, 159-175 (2007).

**参考文献**

Corpus of Middle English Prose and Verse, University of Michigan (2006).

<http://quod.lib.umich.edu/c/cme/index.html>

Middle English Dictionary, University of Michigan (2001).

<http://quod.lib.umich.edu/m/med/>

Oxford English Dictionary, 2nd Edition, Version 4.0 (Windows & Mac) (CD-ROM), Oxford University Press (2009).

